

ワクチン接種で死亡者数急増は本当か？ 専門家が「日本は超過死亡率が最も少ない国のひとつ」と説く理由

12/5 日ディリー新潮



原因はワクチンか、それとも…（新潮社）

メディアや医療関係者が新型コロナ「第8波」とインフルエンザの同時流行への警戒を呼び掛けるなか、ネットを中心に論争を呼んでいるのは、むしろ「超過死亡」の数字である。今年に入り“戦後最多のペース”で増加しているという死亡者と、“沸騰ワード”となった超過死亡をどう読み解くべきか——専門家に聞いた。

日本の死亡率の推移とワクチン接種率との相関がひと目でわかる驚きの研究データ

現在、議論の的となっているのが11月25日、厚労省が公表した今年9月の人口動態統計の速報値だ。死亡者の数は12万7040人で、前年同月と比べ1万1334人増加。8月はさらに高い水準で死亡者13万5649人、前年同月比で1万7845人増となった。

今年1月から9月までの死亡者数はすでに115万人を超え、戦後最多となった2021年の143万9856人（確定値）を超える勢いを見せている。なかでも今年2月と8月の死亡者は前年より2万人近く急増。ちょうどワクチンの3回目と4回目の接種時期と重なるため、ネット上では「ワクチンによる死亡」を疑う声が増している状況だ。

そもそも超過死亡とは「例年より増えた死亡者数」を指し、前年と単純に比較した数字を“超過死亡”といっても間違いではないが、本来は精緻な算出法によって導かれる数値という。

東京慈恵会医科大学の浦島充佳教授（分子疫学研究部部長）が話す。

「世界保健機関（WHO）が20年1月から21年12月までの新型コロナ・パンデミックによる超過死亡を発表しましたが、その数は世界で1500万人にもなります。この数字は新型インフルエンザや香港風邪などよりはるかに多く、今年のおミクロン株の影響を考慮すると、最終的にコロナによる超過死亡はスペイン風邪に迫るとも考えられている。ただし、ここでいう超過死亡とは、コロナ前の各国の死亡者数のトレンド（推移や傾向など）

から、コロナが流行しなかったと仮定したときに予測される2年間の死亡数を計算。その数を、実際の全死因による総死亡者数から差し引いた数になります」

「1000万人」の過少報告

一方でWHOに報告された各国の同期間におけるコロナ死亡者数は計540万人に過ぎず、1000万人近くが過少報告されていた形だ。その理由を浦島氏がこう説明する。

「日本など各国のWHOへの報告数は、PCR検査陽性者が死亡したケースのみカウントされています。他方、超過死亡にはコロナで亡くなったにもかかわらず他の死因で届けられたケースや、医療逼迫により適切な治療を受けられずに亡くなったケースなども含まれるため、届け出数より多くなっている」

日本でも適切なタイミングでの治療を逸した救急患者の存在（救急搬送困難事例の増加）や、感染を恐れて糖尿病や高血圧などの持病があるにもかかわらず病院から足が遠ざかる「受診控え」の問題など、コロナ禍に起因する“コロナ関連死”が相当数にのぼるとも指摘されている。

「平均余命」と「ワクチン接種率」

前述のように超過死亡には交通事故死や自殺など全死因が含まれるため、逆にいえばコロナ禍でインフルエンザなど他の感染症が減少、あるいは外出を控えたことで交通事故死が減るなどすれば、超過死亡がマイナスになることもある。

実際、浦島教授らの研究チームがWHOのデータをもとに算出したところ、日本の同期間（20年1月～21年12月）における超過死亡率（超過死亡者数を人口10万人あたりに換算した数値）はマイナスで、調査した世界164か国のなかで2番目に低かったという。ちなみに世界で超過死亡が最も少なかったのは中国だが、実態に即した正確なデータがどこまで反映されているか不明な部分が残し、一概に評価できない面があるという。

「新型コロナによる死亡は高齢者で最も多いため、“世界一の高齢者大国”である日本では当然、超過死亡も高くなると考えられました。しかし調査の結果は、意外にも日本は超過死亡率が最も少ない国のひとつであるというものでした。その理由を探るため、研究チームがコロナ流行前の健康や人口、経済など50の指標との相関を調べたところ、とくに高い相関を示したのが〈60歳の平均余命〉と〈21年末までのワクチン2回接種率〉です」

とりわけ影響が強いと見られる相関因子が“60歳の人があと何年生きられるかの平均値”をあらわした「60歳の平均余命」という。

「平均余命が長いということは、誰でも高度な医療を受けられる環境や地域医療の質の高さ、国民の高い健康意識などが背景にあります。つまりコロナ以前の“平時”における医療インフラや資源こそ、コロナ禍という“有事”においても超過死亡を低く抑えることに寄与したと推察できる。データは21年12月までのものなので、いま現在にそっくり当てはめることはできませんが、今年に入ってから医療インフラや資源が急激に悪化したとは考えにくく、22年も世界と比較して日本の超過死亡率は低い水準で推移する可能性が高いと考えます」（浦島氏）

10年以上前から死亡率は右肩上がり

研究結果はワクチン接種がコロナの重症化予防に有効であることも示しているが、今年に入ってから死亡者増加とワクチンとの関連については、現時点で「不明」というほかない

という。

国内のコロナ感染による累計死者数はすでに5万人を超え、この1年間だけで3万人以上が増加。しかしハイペースで増えている死者数についても、浦島氏はこんな視点を提示する。

高齢化の急速な進行で、実はコロナの有無にかかわらず、日本の死亡率は長らく“毎年、過去最高”を更新しています。11年の東日本大震災以降も一貫して増加傾向が続いており、平均すると毎月10万～13万人程度が亡くなっている。数十年単位のスパンで眺めると、今年の死亡者数が際立った上昇を示している点は見られず、超過死亡についてはより冷静な議論が必要と考えます」

超過死亡に注目が集まるのは国民の間に「未知への不安」があるからだ。国や研究機関による早急な検証が待たれる。

デイリー新潮編集部